『心理学紀要』（明治学院大学）第 33・34 合併号　2024 年　13-24 頁

【原著】

抑うつ傾向に関連したワルテッグ描画テストとバウムテストの描画特徴

滑　川　瑞　穂（明治学院大学心理学部）
横　田　正　夫（日本大学文理学部）

要　約

本研究の目的は，健常者を対象に，抑うつ傾向をとらえやすい指標を検討すること，3 事例から 2 種の描画を併用して抑うつ的な絵の特徴を考察することであった。指標は，先行研究で示された指標や筆者らが抑うつと関連すると想定した指標を用いた。抑うつ高群と抑うつ低群に分類して検討した結果，抑うつが表現されやすいのは，ワルテッグ描画テストでは‘第 3 図の右への方向性に反応していないこと’，バウムテストでは‘小さいサイズ’であった。3 事例では，バウムテストの全体的評価から抑うつ気分の強さやエネルギーの低下を直感的に評価することができたが，ワルテッグ描画テストを同時に実施することで，参加者の心理的な課題を考察しやすくなると推測された。バウムテストから抑うつ傾向を確認することが難しい事例でも，ワルテッグ描画テストを補完的に使用できると考えられた。

キーワード：ワルテッグ描画テスト，バウムテスト，描画法，抑うつ，大学生

問題と目的

重症度は異なるものの，健常者の抑うつと精神障害のうつ病はその連続性が想定されている（大野，2000；奥村・坂本，2009）ため，健常者を対象とした調査によっても，健常者の抑うつ状態だけでなくうつ病に関する示唆がえられるといえる。抑うつ的な人々の認知的特徴には，否定的に偏った認知に基づいて自己や未来を捉える認知のゆがみが挙げられ（Beck, 1976 大野訳 1990），独自の認知を介して外界の刺激が認識されると考えられる。

抑うつのアセスメントは，自己評価式抑うつ尺度 Zung Self Rating Depression Scale（SDS）（Zung, 1965; 福田・小林 1973），うつ病自己評価尺度 Center for Epidemiologic Studies Depression Scale（CES-D）（Radloff, 1977; 島・鹿野・北村・浅井，1985）といった質問紙法で重症度を確認することが通常である。同時に，投影法を用いて現在のエネルギー水準の程度を確認したり，抑うつの背景にある葛藤について把握したりすることができると考えられる。たとえば，描画上では，内因性うつでは描画表現は乏しくなることや，心因性・神経症性うつでは不安や恐怖などのカタルシス的な描画表現が認められること（徳田，1994）が示されている。描画法のなかでも，ワルテッグ描画テストは，小さな枠内の刺激図形に描きこむため，1 枚の画用紙を提示されるよりも負担感や圧迫感が少なく，取り組みやすい可能性がある。用紙は描き手にとっての「環境」とされる（市来・内藤・金井，2005）ことから，抑うつ状態によって思考や感情の鈍麻が生じている人々には，

画用紙の余白が広いほど，描画すること自体や画用紙に関与するエネルギーを要するといえる。

ワルテッグ描画テスト（Wartegg, 1939）は，「8 つの枠すべてに何か描いてください」という教示に基づいて，刺激図形の描かれた 8 個の正方形のなかに鉛筆で描画し，現在の心理状態やパーソナリティの特徴を把握する描画法である。この描画法は，Wartegg のアイデアによるものだが，全体性心理学の考えを背景に持つ Sander, F. が考案した線をつなげて図形を作る空想テスト（Phantasie Test）に影響を受けたといわれる（Kinget, 1952）。8 つの刺激図形にはそれぞれ象徴や意味が想定され（表 1），臨床現場で使用しやすい。国内では 1970 年以降に研究が増え（たとえば，岩渕，1970），近年では Avé-Lallemant（1994，高辻ら訳 2002）の現象学的な解釈法が紹介され，スコアリングが可能な評価法であるクリシワルテッグシテム（以下 CWS）に関する著書（Crisi & Palm, 1998 村上訳 2022）も出版されているが，臨床現場での活用や研究は十分とはいえない。その理由の一つとして，実施法や解釈法が十分に周知されていない現状であると同時に，バウムテストや風景構成法など長く頻用されているほかの描画法があることが挙げられる。心理検査の採用頻度を調べた調査（小川・福森・角田，2005）では，1997 年と 2004 年は 1 位がバウムテストとなっている。

しかし，抑うつ的な人が，否定的に偏った認知を有し，それを通して状況や物事を把握すると想定すると，自由に描画するよりも，ワルテッグ描画テストのような既存の刺激図形に自分なりの表現を加えて描く課題のほうが，ネガティブな認知に基づくイメージが喚起され，抑うつの特徴である認知的なゆがみを捉えやすい可能性がある。滑川・横田（2022）では，ワルテッグ描画テストを用いて，健常者の抑うつ状態では刺激図形の性質から連想されにくい絵を描く傾向が示されている。頻用されているバウムテストと，ほかの描画法と同じく実施が容易で，新しい解釈法が紹介されたことによって利用が増加する可能性があるワルテッグ描画テストの特徴を照らし合わせて考察することは，臨床現場で役立つと思われる。

バウムテストで表現される抑うつ傾向は，小さいサイズ（高橋，2011），黒く塗られていること（名島，1998；Koch, 1957 岸本ら 2010），垂れ下がった枝や茂みまたは下に伸びる枝（Castilla, 1994 阿部訳 2002；高橋，2011；Koch, 1957 岸本ら訳 2010），葉のない枯れ木（徳田，1994；高橋，2011），描線が切れ切れになっている幹（Castilla, 1994 阿部訳 2002），輪のようなぐるぐる書きの樹冠陰影（Stora, 1975 阿部訳 2011），均等に塗られた陰影（Stora, 1975 阿部訳 2011），筆圧の弱い描線や不連続で何度も描き加えられた描線（Castilla, 1994 阿部訳 2002），用紙の左下に描かれた木（Bolander, 1977 高橋訳 1999）などが挙げられる。一方，ワルテッグ描画テストでは，うつ病の 1 事例から描画が説明的であること（福屋・松原，1996），YG 性格検査との関連から事物の絵が多い傾向（正保，1999），少数事例から空欄のある表現，パターン的な表現，第 6・8 図の記号的な表現，葛藤が読み取れる表現（滑川・横田，2021），CWS（Crisi & Palm, 1998 村上訳 2022）の反応性の抑うつ状態や大うつ病性障害を示す指標から，第 3 図の逆方向性，第 5 図の逆方向性，傷ついているや壊れているといった損傷反応，人間反応の少なさ，消極的な運動反応などが示されているが，知見は限定的である。

なお，描画の信頼性や妥当性に関しては，バウムテストでは，複数回の描画から絵の安定性を確認することで再検査信頼性は一定の水準に達していると判断されている（たとえば佐渡・松本・田口，2013）。また，大規模な調査から，参加者が有する心理的特徴と木の特徴とを複数の評価者で分類し，統計的検討に基づいて心理的特徴を表す木のサインが抽出されている（Stora, 1975 阿部訳 2011）。一方，ワルテッグ描画テストでは，解釈法の一つである CWS では信頼性や妥当性が検討され，抑うつ状態やうつ病を判別する指標も設けられているが（Crisi & Palm, 1998 村上訳 2022），Avé-Lallemant の解釈法（1994，高辻ら訳 2002）では事例による理解や解釈が中心で，各解釈法で十分に議論されているとはいえない現

表 1　ワルテッグ描画テストの刺激図形の特徴について（詫摩・渥美（1963）を参考に一部改変して筆者らが作成）

	図形	刺激特質	心的機能・心的領域	Avé-Lallemantによる解釈（杉浦・金丸，2012）	Crisi（2013）による臨床的な意味
	中央に置かれた小さな丸い点	・中心的 ・集中的	・自己感情 ・集中力	・テーマ：自我 ・心的機能・心的領域：中央の点を使って多様な描画がなされる	・自己評価
	小さな波形をした線	・流動的 ・浮動的	・感情状態 ・外界との関係	・テーマ：感情 ・心的機能・心的領域：感情状態，感情表出	・女性対象関係
	3本の規則的に長くなっていく線	・厳格性 ・規則性 ・上昇傾向	・進展や拡張の様式 ・（衝動と抑制との関係）	・テーマ：達成 ・心的機能・心的領域：上昇，努力，意欲	・利用可能なエネルギー
	右上に置かれた黒い四角形	・重量感	・（幻想・不安の領域） ・（無意識の領域）	・テーマ：問題 ・心的機能・心的領域：重荷，重さ，問題性，困難	・男性対象関係
	拮抗する2本の線	・葛藤 ・緊張感	・葛藤や緊張に対する態度 ・衝動力と統制力の関係	・テーマ：緊張 ・心的機能・心的領域：葛藤や緊張に対する態度，力動性，能力	・攻撃的エネルギー
	上部に置かれた水平線とそれとは一見無関係な短い垂直線	・一つのものへの完成を要請	・統合能力 ・知性や理性	・テーマ：統合 ・心的機能・心的領域：統合能力，完全性	・現実との関係
	点線の小さな半円形	・繊細な感じ	・感受性	・テーマ：感受性 ・心的機能・心的領域：感受性，敏感性	・性的エネルギー
	下に開いた弧	・気楽なゆったりした感じ ・覆い隠すような感じ	・安全性（保護） ・結合能力 ・結合状態	・テーマ：安心感 ・心的機能，心的領域：安心感，安全感	・社会化

注）表内の心的機能・心的領域の（　）は仮説の域を出ないと詫摩・渥美（1963）によって説明されている

状である。しかし，8つの刺激図形の象徴や意味を用いることで，質問紙だけではとらえられない心身のエネルギーの程度や抑うつの背景にある課題などを，描画から考察できる可能性がある。

以上から，健常者の抑うつ傾向を対象に，上記の先行研究でえられている指標に該当するワルテッグ描画テストとバウムテストの出現数から，抑うつ傾向をとらえやすい指標を検討すること，本調査独自の指標を抽出し出現数を検討すること，バウムテストとワルテッグ描画テストを併用することで検出できる絵の抑うつ的な特徴を事例から検討することの3点を本研究の目的とした。

描画の指標は，解釈を含まずに絵の外観だけで明確に判断できるものを対象とし，類似した指標は一つにまとめた。本調査ではバウムテストとワルテッグ描画テストの実際の描画特徴を示しながら，出現数の量的な分析と絵の質的な検討を行った。

方　法

1. 調査参加者　欠損値や未記入があった21名を除外し，関東地方の大学に在籍する大学生159名（男性87名，女性72名，平均年齢19.71歳（標準偏差1.14）を有効回答数とした。本調査では，滑川・横田（2022）のワルテッグ描画テストの量的調査を実施した際の159名の調査参加者のうち，32名の参加者の描画を対象としている。滑川・横田（2022）では，杉浦・金丸（2012）で紹介されているAvé-Lallemantによる評価項目に基づいて絵を分類し，その出現率を量的に検討した。しかし，今回のバウムテストとワルテッグ描画テストの出現率や事例の検討は，紙幅の都合上掲載できなかった。

滑川・横田（2022）では，この159名から，後述の日本版ベック抑うつ質問票Beck Depression Inventory-Ⅱ（以下，BDI-Ⅱとする）（Beck, Steer & Brown，1987 小嶋・古川訳2003）による抑うつの得点分布が障害域（14点以上）に位置し，

自動思考質問紙の得点が全体平均より高い 63 名を抑うつ群（男性 31 名，女性 32 名），抑うつが正常から極軽症域（13 点以下）に位置し，かつ自動思考が平均より低い 66 名を健常群（男性 38 名，女性 28 名）と設定し，計 129 名を分析対象とした。なお，自動思考は，直近の出来事等によって一時的に抑うつ気分が高まっている参加者でなく，ネガティブな認知傾向を有している者を対象にするため，抑うつ得点だけでなく抑うつに直接的に影響する要因（西川ら，2013）として測定した。

今回の調査では，計 32 名を対象としているが，これは抑うつ状態が強調された描画特徴と健康な描画特徴を抽出することをねらいとして，上記の抑うつ群 63 名のおよそ上位 1/4 に該当する 16 名，健常群 66 名のおよそ下位 1/4 に該当する 16 名の計 32 名の描画を対象としたためである。以上から，本調査の参加者は，抑うつ群 16 名（男性 6 名，女性 10 名，抑うつ平均 33.31 ± 4.50 点（重症域），自動思考平均 115.87 ± 14.39 点），健常群 16 名（男性 10 名，女性 6 名，抑うつ平均 1.50 ± 1.06 点（正常域），自動思考平均 47.56 ± 12.49 点）であった。群の名称については，両群の参加者は健常の大学生であるが，本調査上では抑うつ群，健常群と呼ぶこととした。

2. 調査内容　質問紙では年齢，性別に続き，以下の質問項目を尋ね，その後 2 種の絵を描くように指示した。描画については絵のうまい，へたを問うものではないことを事前に伝えた。

1）抑うつ　日本版 BDI-Ⅱ（Beck et al., 1987 小嶋・古川訳 2003）の 21 項目に 4 段階評定で回答を求めた。0-13 点が正常―極軽症域，14-19 点が軽症域，20-28 点が中等症域，29-63 点が重症域とされる。一般大学生を対象とした丹野ら（1998）の研究では平均 9.12（7.26）である。

2）自動思考　坂本ら（2004）が日本語版を作成した自動思考質問紙 30 項目を用いて，5 段階評定で回答を求めた。坂本ら（2004）では男子大学生・女子大学生の平均はそれぞれ 81.70，79.74 である。

3）ワルテッグ描画テスト　A4 判テスト用紙の上部に内法 4 cm の正方形の枠が 8 つ描かれている用紙を用いて「8 つの枠すべてに何か描いてください。1 から順に 8 まで進めてください」と教示した。描く順序については，集団実施であり各自を見守ることができないこと，順序が一定であることで考察しやすくなる可能性を考慮し，1 から 8 の順で行った。下部に各枠に何を描いたかを記した。ワルテッグ描画テストでは，各研究者によって刺激図形の象徴的意味が考察されている（表 1）。また，生物的・生命的・有機的なものが描かれやすい第 1・2・7・8 図，人工的・無機的なものが描かれやすい第 3・4・5・6 図が想定されている。

4）バウムテスト　「1 本の木を描いてください」と高橋・高橋（2010）の方法で教示し，何の木であるかを裏面に記してもらった。

3. 調査方法　実施に際して描画用の HB の鉛筆を配布した。講義終了後に 15 分程度で集団実施した。参加は強制ではなく，データは匿名化されること，本調査の質問項目によって心身の不調が自覚され，相談を希望したいと感じた参加者は大学内の学生相談を訪れるよう促した。本調査は帝京平成大学倫理委員会の承認を得て実施された。

4. 分析手続き

‘空欄のある表現’などの描画の評定は，どの群に位置する描画であるかを確認しながら，普段描画を用いた臨床実践と研究を行う筆者らで行った。なお，ワルテッグ描画テストの評定経験は両者ともに約 6 年であった。3 事例の考察も筆者らで行った。

なお，この 3 事例の選出については，バウムテストの検討の結果‘小さいサイズ’にのみ有意差が認められたことから，抑うつ群の 16 名のうち，小さいサイズに該当した 12 名とそれに該当しなかった 4 名を基準に選出した。つまり，もっとも小さいサイズで描かれた 1 枚を抑うつがとらえやすい事例とし，小さいサイズには該当せず，か

表２　２種の描画に認められた描画特徴の出現数と割合（のべ人数）

	抑うつ群 上位1/4（16名）	健常群 下位1/4（16名）	*Fisher* 検定結果
ワルテッグ描画テスト			
空欄のある表現	0（ 0%）	0（0%）	
パターン的表現（５枠以上が類似表現）	2 (13%)	0（ 0%）	
7枠以上の非生物的な表現（事物の絵の多さ）	2 (13%)	1（ 6%）	
人間反応の少なさ（1枠も人間が含まれない）	2 (13%)	2 (13%)	
第6図と第８図の記号的な表現	0（ 0%）	1（ 6%）	
第3図の右への方向性に反応していない	10 (63%)	3 (19%)	p<.01
第5図の右への方向性に反応していない	2 (13%)	2 (13%)	
不自然な表現（損傷反応を含む）	2 (13%)	0（ 0%）	
悲観的な人間像（困っている顔など）	5 (31%)	4 (25%)	
刺激図形の無視	1（ 6%）	0（ 0%）	
4枠以上の刺激図形の性質に応じていない	3(19%)	0（ 0%）	
バウムテスト			
小さいサイズ	12(75%)	3 (19%)	p<.001
黒く塗られている・均等に塗られた陰影	2 (13%)	1（ 6%）	
下向きの枝	1（ 6%）	1（ 6%）	
枯れ木	0（ 0%）	1（ 6%）	
描線がきれぎれになっている幹	0（ 0%）	1（ 6%）	
ぐるぐる描きの樹冠陰影	0（ 0%）	1（ 6%）	
筆圧の弱い描線	2 (13%)	2 (13%)	
不連続で何度も描き加えられた描線	1（ 6%）	1（ 6%）	
偏った用紙の位置（左上）に描かれる	1（ 6%）	0（ 0%）	
うろのある幹	2 (13%)	0（ 0%）	
樹冠のはみだし	2 (13%)	3 (19%)	
不自然な表現（木に見えづらいなど）	2 (13%)	0（ 0%）	

注）検定結果の空欄箇所は有意差はなし

つ，絵の様子から抑うつ感が把握しづらいと思われる２枚を，抑うつがとらえにくい事例として選出した。

結果と考察

1. ワルテッグ描画テストの特徴について

抑うつに関連すると推測されるワルテッグ描画テストの 11 指標について，抑うつ群と健常群との出現数を示した（表 2）。*Fisher* の直接確率検定の結果，有意差が認められた項目は，‘第３図の右への方向性に反応していない’のみであった。

‘第３図の右への方向性に反応していない’では，健常群３名（19％）に対して抑うつ群では 10 名（63%）で，有意差が認められた（$p < .01$）。第３図の右に進むにつれて長くなる刺激図形は，上昇や達成（杉浦・金丸，2012），利用可能なエネルギー（Crisi & Palm, 2018 村上訳 2022）を象徴するといわれ，抑うつ群がこの方向性に反応しづらかった可能性はある。また，CWS では第３図は抑うつ状態を判定する指標の一つに含まれており（Crisi & Palm, 2018 村上訳 2022），本調査の結果も一致するといえる。一方，方向性を評価している別の項目として，葛藤や緊張感（杉浦・金丸，2012）を象徴するといわれる第５図の右へ

図 1　‘悲観的な人間像’の表現
（左は健常群，中央・右は抑うつ群）

図 2　抑うつ群の‘刺激図形の無視’

の方向性では，両群 2 名ずつで有意差は認められなかった。

‘空欄のある表現’は両群とも 0 名で有意差は認められなかったことから，今回の参加者では刺激図形を空欄のまま終えた参加者はおらず，抑うつ群でもすべての枠に描画できたことが明らかとなった。‘パターン的表現’は健常群 0 名に対して抑うつ群 2 名で有意差は認められなかったが，抑うつ群の描画は，5 枠以上に人や動物といった生き物の顔を描いた表現であった。‘7 枠以上の非生物的な表現’は抑うつ群 2 名，健常群 1 名，‘人間反応の少なさ’では両群ともに 2 名で有意差は認められなかった。‘第 6 図と第 8 図の記号的な表現は’抑うつ群 0 名，健常群 1 名で有意差は認められなかった。これらの結果から，第 3 図以外の表現では有意差が認められないことが示された。

続いて，本調査上で特徴的と思われた指標について記す。ただし，これらの描画特徴も両群で有意差は認められなかった。

‘不自然な表現’では抑うつ群 2 名，健常群 0 名で，抑うつ群の 2 例は，首と足が切断された人や，人の横顔に不要と思われる描線が加えられ顔として把握しづらい表現（図 1 の右の絵）であった。なお，バウムテストの‘不自然な表現’指標でも同じ 2 名が挙げられた。また，‘悲観的な人間像’では，抑うつ群 5 名，健常群 4 名で，両群の有意差は認められず，どちらの群にも出現数が多いことが明らかとなった。実際の絵を見ると，健常群では第 2 図を眉毛や目などに見立てた困った表情が多く，抑うつ群では上からブロックが落ちてくる人，先の‘不自然な表現’でも示した顔の表現などが認められた（図 1）。‘刺激図形の無視（刺激図形を使用せずに関連のない絵を描く）’が抑うつ群 1 名，‘4 枠以上の刺激図形の性質に応じていない’は抑うつ群 3 名が認められ，いずれも健常群は 0 名で，有意差は認められなかった。‘刺激図形の無視’は刺激図形が描かれていない白紙の箇所に「なると」を描いたものであった（図 2）。

以上から，抑うつ群と健常群に有意差が認められた描画特徴は，‘第 3 図の右への方向性に反応していない’のみであった。

2. バウムテストの特徴について

抑うつに関連すると考えられるバウムテストの 12 指標について，抑うつ群と健常群との出現数を示した（表 2）。*Fisher* の直接確率検定の結果，有意差が認められた項目は，‘小さいサイズ’のみであった。

‘小さいサイズ’では，健常群 3 名（19%）に対して，抑うつ群では用紙半分以下から 1/4 サイズは 12 名（75%）で，*Fisher* の直接確率検定の結果，有意差が認められた（p<.001）。なお，確認を進めた結果，健常群では，用紙半分以上から 3/4 以下サイズ 7 名，用紙 3/4 以上サイズ 6 名で，81%は用紙に比して適度な大きさ，または用紙いっぱいに描いている表現であった。木の小さいサイズは主にエネルギーの貧困さを示し，抑うつを捉えやすい可能性があると考えられた。

‘黒く塗られている・均等に塗られた陰影’は，抑うつ群 2 名，健常群 1 名，‘下向きの枝’は両群ともに 1 名であった。‘枯れ木’‘描線がきれぎれになっている幹’‘ぐるぐる書きの樹冠陰影’

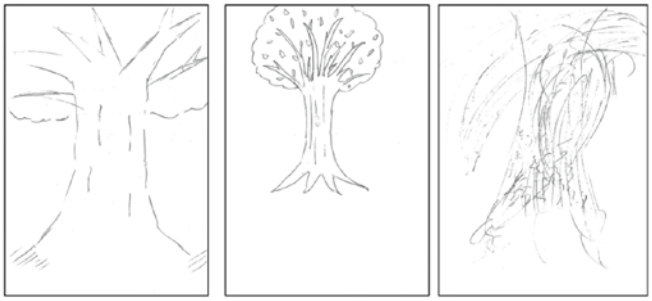

図3　バウムテストの‘樹冠のはみだし’
（左は健常群，中央・右は抑うつ群）

は，それぞれ抑うつ群ではなく健常群に1名認められた。‘筆圧の弱い描線’は両群2名ずつ，‘不連続で何度も描き加えられた描線’は両群1名ずつであった。以上の指標は，今回の調査では抑うつ群の明確な特徴として検出することができなかった。

続いて，本調査上で特徴的と思われた指標について記す。ただし，これらの描画特徴も両群で有意差は認められなかった。

‘偏った用紙の位置に描かれる’は先行研究（Bolander, 1977 高橋訳 1999）では用紙の左下であったが，今回は左上に位置する木が抑うつ群で1名認められた。また，‘うろのある幹’で抑うつ群2名，健常群0名，‘樹冠のはみだし’では抑うつ群2名，健常群3名，‘不自然な木’で抑うつ群2名，健常群0名であった。‘うろ’は直接的な抑うつの指標ではないものの，過去の心理的・身体的外傷体験（高橋，2011）の指標であるため，有意差は認められなかったものの，抑うつ群のみで出現することは了解できる。また，描画上の印象としては，健常群の樹冠のはみ出しは，エネルギーの高さによるはみだしの印象を受けるが，抑うつ群では見通しの悪さや衝動性の統制不良によりはみ出している印象を受ける（図3）。‘不自然な表現’では乱れた描線や顔が描かれ擬人化されている表現など，木に見えづらい表現も認められた。‘不自然な表現’は2種の描画で同じ2名に認められた（うち1名は図3の右のバウムテスト）。

以上から，抑うつ群と健常群に有意差が認められた指標は，木の‘小さいサイズ’で，木全体の大きさの重要性が改めて明らかとなった。

3. 2種の描画からとらえられる特徴

最後に，臨床現場ではバウムテストが採用されることが多いため，バウムテストとワルテッグ描画テストを併用することで，新しい着眼点や解釈が得られるかどうか，抑うつ群の3事例の絵から考察した。

なお，この3事例の選出理由として，先の検討により抑うつ群では‘小さいサイズ’は12名（75%）が認められているため，このなかでもっとも小さいサイズで描かれた1名を抑うつが考察しやすい事例として選出した。また，‘小さいサイズ’に該当しない4名のうち，絵の様子から抑うつ状態が把握しづらい2名を，抑うつを考察しづらい事例，曖昧な事例として選出した。除外された2名（うち1名は図3右）は抑うつ的な様子よりも，衝動的な描線や奇妙な表現などがとらえられたことから，今回は検討しなかった。ただし，16名の限られた描画を対象とし，また，以下の絵の解釈には筆者らの理解が含まれているため，別の観点から解釈は生じうることを断っておく。

(1) バウムテストから抑うつを考察しやすい事例A（図4）

事例A（男性）は，バウムテストの木は左上の隅の区画に非常に小さく描かれている。先の検

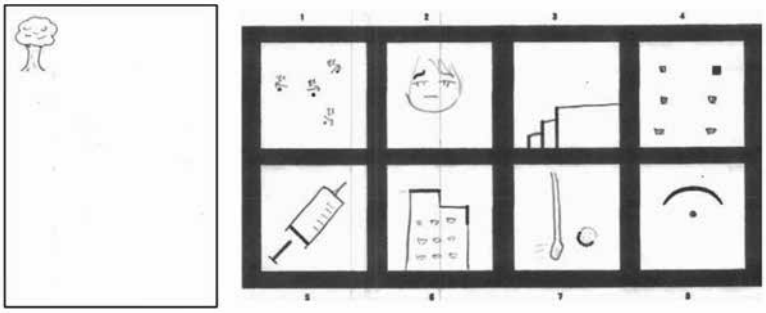

図 4　事例 A のバウムテストとワルテッグ

討の‘小さいサイズ’に明らかに該当する小ささで，‘偏った用紙の位置’に描かれている。用紙を現実状況ととらえると，本例は非常に萎縮しており，課題を主体的に扱うことは難しい状況と考えられる。バウムテストだけを眺めても，抑うつなどの消極的な状態である可能性は十分に予測できる。また，左上の隅の区画は神秘性や芸術などを象徴し（Bolander, 1977 高橋訳 1999），非実際的なものに惹かれる傾向にあり，逃避的とも解釈できる。加えて，左に大きく偏る様子からは，父親の影響の乏しさなども推測される。しかし，木の形態としてはさほど不自然ではなく，幹の表面には傷のように見える描線があるものの，幹の輪郭線は比較的はっきりとした筆圧で描かれている。自我や情緒の流れはそれなりに活発であるようにもとらえられるが，小さすぎるためにその仮説も積極的には採用できず，樹冠は幹にわずかにかぶさるような様子であり，知性で情緒を隠しているようにも見える。

ワルテッグの各刺激図形は，①粒子，②困った顔，③階段，④サイコロ，⑤ちゅうしゃき，⑥ビル，⑦ゴルフ，⑧フェルマータ，が描かれている。大まかに絵を眺めただけでも，感情領域を象徴する第 2 図の「困った顔」が目に飛び込んでくる。先の検討の‘悲観的な人間像’に一致し，やりきれないような表情は，描画時の心理状態を推測できる一つの要素である。同時に，先の検討の‘第 3 図の右への方向性に反応していない’にも一致しており，階段は踊り場となって進行を止めてしまい，意欲や気力の低下を象徴している。また，第 7 図は，小さな点で描かれた繊細な刺激図形で，感受性や親密な対人関係を象徴するが，刺激図形の性質とは真逆の硬いゴルフボールとなり，刺激図形を活かせていない。第 2 図と合わせて考えても，感情面の課題があることが推測できる。また，自我や自己評価を象徴する第 1 図もあちこちへと向かう粒子となっている。アイデンティティの不安定さも読み取ることができる。粒子，サイコロ，フェルマータは微小な物体や記号で，小さな対象へと意識が向くような萎縮した心理状態かもしれない。これはバウムテストの小さすぎる木とも共通しており，対象を遠ざけ小さくすることでなんとか関与しているようである。

以上から，事例 A では，バウムテストの全体的印象により，心理的に内閉していて現実に関与するエネルギーが不足し，抑うつ的である可能性が容易に推測できる。さらに，ワルテッグ上の絵の表現や刺激図形を活かしきれていない様子から，抑うつ感，意欲や達成欲求の低下が示唆されるとともに，どういった側面に課題を抱えているのかについて考察することができる。

⑵　バウムテストから抑うつを考察しづらい事例 B（図 5）

事例 B（女性）のバウムテストはクリスマスツリーを描いている。先の検討の‘小さいサイズ’に該当せず，クリスマスツリーが描かれている。クリスマスツリーは，特定の出来事を期待した状態を表すと同時に，空想の木のように現実への不満を示すと説明されている（Bolander，1977 高橋訳 1999）。本調査の実施時期は，実際にクリス

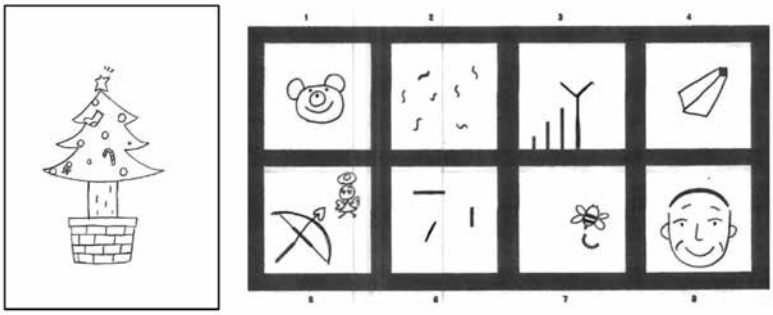

図５　事例Ｂのバウムテストとワルテッグ

マスシーズンが迫っていた頃であり，やや状況依存的ともいえる。こうした解釈を含むことを考慮しつつ，本例の場合は，描線に少し硬さはあるもののためらいがなく，筆圧も比較的強く，星がきらめいている装飾などから華やかな雰囲気にも見える。バウムテストからだけでは，エネルギーの低下は明確には把握しづらい。

ワルテッグの各刺激図形は，①くま，②ムダ毛，③ガラケーのでんぱ，④りんごの角切り，⑤天使のアレ，⑥折れたシャーシン，⑦ハチ，⑧おじいちゃん，が描かれている。一見すると，第１図と第８図の微笑んだ愛らしい顔に注意が向くが，第２図の感情領域は，刺激図形のくりかえしによって「ムダ毛」を描き，感情的な多様さや豊かさを読み取ることができない。ムダという表現にも無力感や未充足感が感じられる。刺激図形のくりかえしは第６図も同様である。第６図は，本来は２本の刺激図形を統合することで現実検討力をとらえる図形であるが，「折れたシャーシン」では第２図と同様に，意欲や主体性が感じられず，問題解決能力も発揮しづらい現状であることが推測される。ムダ毛，折れたシャーシン以外にも，リンゴの角切り，ガラケーのでんぱなども，不完全なものや不要なものを連想させ，そうした気持ちが刺激されやすい状態かもしれない。一方，先の検討の‘第３図の右への方向性に反応していない’には該当せず，一見すると右への方向性に反応しているが，Crisi & Palm（1998，村上訳 2022）では，右に進む描線が複数描き加えられることで第３図の性質に反応しているとみなす。その基準で考えると本例も不十分さが残る。

以上から，事例Ｂでは，バウムテストは現実の不満を示すクリスマスツリーと解釈できるものの，木全体の明るい雰囲気や描線の様子などから，抑うつ感をすぐさま明確にとらえることは難しい。しかし，ワルテッグの各図を見ていくと，感情を扱うことの難しさ，現実的な問題解決能力の低下，意欲の高まらなさといった課題を確認することができる。

⑶　バウムテストから考察できる抑うつに曖昧さのある事例Ｃ（図６）

事例Ｃ（女性）のバウムテストは，用紙上部への浮き上がりはあるものの，先の検討の‘小さいサイズ’には該当しないが，‘樹冠のはみだし’が認められる。特に左側の根は大きく先端も鋭く，アグレッションを感じさせる。無理して環境に適応しようとしている面もあるかもしれない。幹にはうろが描かれ，枝先も根と同様にとがった先端が目立つ。細かな枝分かれから，知的に分化していると推測されるが，同時にエネルギーを敵意や攻撃性といった形で表出するほうかもしれない。木全体の直感的印象からは弱々しさは感じづらく，抑うつをとらえるには曖昧さの残る表現といえるだろう。

ワルテッグも各刺激図形に丁寧に描きこまれており，一見すると，エネルギーは高い印象を受ける。各刺激図形は，①ネコ，②ハブラシ，③打ち込まれる前のクギ，④フレーミー，⑤フクロウ，⑥きかい，⑦ゆきだるま，⑧カマ，が描かれている。事例Ｃでは，第３図に明確な特徴が現れて

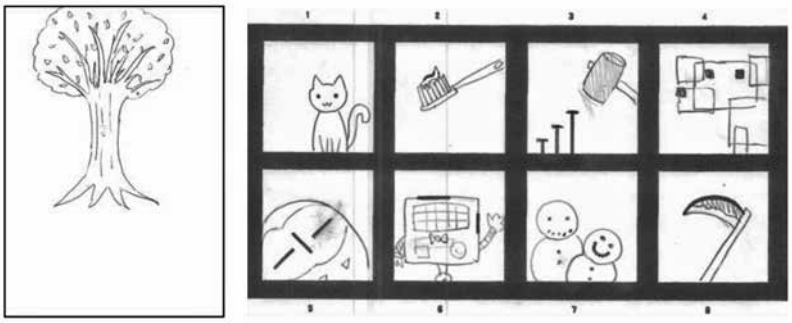

図 6　事例 C のバウムテストとワルテッグ

おり，先の検討で示された‘第 3 図の右への方向性に反応していない’に一致し，右への前進性がハンマーで打ち込まれてしまっている。エネルギーが思うように発揮できない状態であることが推測される。また，第 8 図は柔らかな曲線の刺激図形で，安心感やソーシャルスキルを象徴し，通常は有機的なものを想起しやすい。しかし，本事例では丸みを活かしつつも「カマ」が描かれている。攻撃的な表現ととらえられると同時に，左向きは自己や過去を象徴する面もあるため，安心感が持てず，アグレッションや衝動性は自分自身へと向けられていないか，懸念も生じる。

以上から，事例 C では，バウムテストだけではエネルギーの低下が読み取りづらいが，ワルテッグからは第 3 図の明らかな表現によって，前向きなエネルギーが抑えられている状態であると推測される。また，外界に対するアグレッションに加えて，それらが自己に向くおそれも予測され，自己否定や自己批判といった抑うつに生じやすいネガティブな自己認知が予測される。

まとめと本研究の限界

以上から，抑うつがもっとも顕著に抽出されるのは，ワルテッグ描画テストでは第 3 図の右への方向性に反応していないこと，バウムテストでは小さいサイズであることが示された。しかし，本調査からは新たな指標を見出すことはできなかった。3 事例からは，バウムテストでは，抑うつ気分の強さやエネルギーの低下を全体的印象から直感的にとらえることができるが，これに加えて，ワルテッグ描画テストを併用すると，第 3 図をはじめ各刺激図形からエネルギーや意欲の低さ，感情への関与，現実検討力など，描画上からどのような心理的側面に課題を抱えている可能性があるのかを考察することができた。よって，バウムテストから抑うつを確認することが難しい事例であっても，ワルテッグ描画テストを併用することで理解を深められる可能性があり，双方を補完的に使用できると考えられた。

最後に，本研究の限界として，今回の指標は先行研究から抽出されたものや本調査から独自に抽出したものがあるが，これ以外にも抑うつをとらえられる指標が存在する可能性はある。今回の参加者は，あくまでも講義参加が可能なレベルの健常の大学生を対象としているため，今後も対象者や人数を変更して検討すべきである。また，ワルテッグ描画テストでは抑うつがとらえやすい刺激図形とそうでない刺激図形が存在するといえ，引き続き検討を進めていきたい。

引用文献

Avé-Lallemant, U. (1994). *Der Wartegg Zeichentest in der Lebensberatung.* Munchen: Ernst Reinhardt Veralag. 高辻玲子・杉浦まそみ子・渡邊祥子（訳）(2002). 心理相談のためのワルテッグ描画テスト. 川島書店.

Beck, A.T. (1976). *Cognitive therapy and the Emotional disorders.* New York: International Universities Press. 大野裕（訳）(1990). 認知療法：精神療法の新しい発展 . 岩崎学術出版.

Beck, A.T., Steer, R., & Brown, G. (1987). Beck

Depression Inventory Second Edition. The Psychological Corporation. 小島雅代・古川壽亮（訳）（2003）. 日本版 BDI-Ⅱ. 日本文化科学社.

Bolander, K.（1977）. *Assessing Personality Through Tree Drawing*. NewYork: Basic Books. 高橋依子（訳）（1999）. 樹木画によるパーソナリティの理解. ナカニシヤ出版.

Castilla, D.（1994）. *LE TEST DE L'ARBRE. Relations humaines et problèmes actuels*. Paris:Elsevier Masson. 阿部恵一郎（訳）（2002）. バウムテスト活用マニュアル . 金剛出版.

Crisi, A. & Palm, J. A.（1998）. *The Crisi Wartegg System（CWS）: Manual for Administrations, Scoring, and Interpretation*. Italy: Edizioni Magi. 村上貢（訳）（2022）. クリシ・ワルテッグ・システム 実施・スコアリング・解釈のためのマニュアル. 金剛出版.

福田一彦・小林重彦（1973）. 自己評価式抑うつ性尺度の研究 . 精神神経学雑誌, 75, 673-679.

福屋武人・松原由江（1996）. 描画を技法としてどう使うか ── ワルテッグ描画テストを中心に ──, 臨床描画研究, 11, 3-22.

市来百合子・内藤あかね・金井菜穂子（2005）. The Diagnostic Drawing Series（DDS）における紙のサイズによる描画表現の比較 ── DDS の日本における適用への模索 ──. 芸術療法学会誌, 36, 65-72.

岩渕忠敬（1970）. Wartegg-Zeichen-Test の健康人に対する試験的適用. 順天堂大学文理学紀要, 13, 63-74.

Kinget, G. M.（1952）. The Drawing Completion Test; A Projective Technique for the Investigation of Personality. Newyork: Grune & Stratton INC.

Koch, K.（1957）. *Der Baumtest. 3. Auflage*. Bern: Verlag Hans Huber. 岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男（訳）（2010）. バウムテスト第 3 版　心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房.

正保春彦（1999）. 谷田部 ── ギルフォード性格検査からみたワルテッグ描画テストの反応内容に関する基礎的研究. 臨床描画研究, 14, 167-182.

名島潤慈（1998）. 色彩バウムテストと抑うつ状態の関連. 熊本大学教育実践研究, 15, 1-5.

滑川瑞穂・横田正夫（2021）. うつ病患者におけるワルテッグ描画テストの特徴について. 明治学院大学心理学紀要, 31, 1-12.

滑川瑞穂・横田正夫（2022）. 大学生の抑うつ傾向におけるワルテッグ描画テストの反応特徴. 臨床描画研究, 37, 115-129.

西川大志・松永美希・古谷嘉一郎（2013）. 反すうが自動思考と抑うつに与える影響 . 心理学研究, 84, 451-457.

大野裕（2000）. うつを治す. PHP 新書 .

小川俊樹・福森崇貴・角田陽子（2005）. 心理臨床の場における心理検査の使用頻度について. 日本心理臨床学会第 24 回大会発表論文集, p. 263.

奥村泰之・坂本真士（2009）. 抑うつの連続性理論 ── より質の高い研究に向けての提言 ──. 心理学評論, 52(4), 504-518.

Radloff, L. S.（1977）. The CES-D Scale: A self report depression scale for research in the general population. *Applied Psychological Measurement*, 1, 385-401.

佐渡忠洋・松本香奈・田口多恵（2013）. バウムテストにおける再検査信頼性の見なおし. 岐阜女子大学紀要, 42, 29-39.

坂本真士・田中江里子・丹野義彦・大野裕（2004）. Beck の抑うつモデルの検討 ── DAS と ATQ を用いて ── 日本大学心理学研究, 25, 14-23.

島悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘（1985）. 新しい抑うつ性自己評価尺度について　精神医学, 27, 717-723.

Stora, R.（1975）. *Le test du dessin d'arbre*. Paris: jean pierre delarge. 阿部恵一郎（訳）（2011）. バウムテスト研究 いかにして統計的解釈にいたるか. みすず書房.

杉浦京子・金丸隆太（2012）. 投影描画法テストバッテリー. 川島書店.

高橋雅春・高橋依子（2010）. 樹木画テスト. 北大路書房.

高橋依子（2011）. 描画テスト. 北大路書房.

詫摩武俊・渥美玲子（1963）. ワルテッグ描画テスト. 井村恒郎（監修）. 臨床心理検査法. 医学書院, p. 239.

丹野義彦・坂本真士・石垣琢磨・杉浦義典・毛利伊吹（1998）. 抑うつと推論の誤り ── 推論の誤り尺度（TES）の作成 ──　このはな心理臨床ジャーナル, 4, 55-60.

徳田良仁（1994）. 描画の表現病理. 臨床精神医学, 23, 1135-1141.

Zung, W. W.（1965）. A Self Rating Depression Scale. *Archives of General Psychology*, 12, 63-70.

Wartegg, E.（1939）. Gestaltung und charakter. Ausdrucksdeutung zeichnerischer Gestaltung und Entwurf einer charakterologischen Typologie. Leipzig: Johann Ambrosius Barth.

The drawing characteristics of the Wartegg drawing test and the Baum test related to depressive tendencies

Mizuho Namekawa
(Meiji Gakuin University, Faculty of Psychology)

Masao Yokota
(Nihon University, College of Humanities and Sciences)

Abstract

The purpose of this study was to examine easily identifiable indicators of depressive tendencies in healthy participants and analyze the characteristics of depressive drawings using two types of drawings from three cases. We assessed indicators from previous studies and those hypothesized by the authors to be associated with depression. After categorizing them into high depression and low depression groups, the findings showed that the indicators most suggestive of depression are "lack of reaction to the right direction in Box3" in the Wartegg drawing test and "small size" in the Baum test. Across the three cases, the overall evaluation of the Baum test provided an intuitive assessment of the intensity of depressed mood and energy decline. However, it was suggested that simultaneous administration of the Wartegg drawing test would enhance the understanding of participants' psychological issues. Even in cases where confirming depressive tendencies from the Baum test alone was challenging, the Wartegg drawing test could be used as a complementary tool.

Keywords: Wartegg drawing test, Baumtest, the drawing method, depression, college student